山とスポーツクライミング情報誌

登山月報

JMSCA 登山月報　第667号　令和６年10月15日発行

『奥秩父国師ヶ岳の天狗岩と富士』撮影者：山梨県山岳連盟　こまくさ山の会　温井一郎

No.667

ユース日本代表関連 活動報告 …… 2
スポーツクライミング体験会から …… 4
安全登山講習会報告 …… 5
寄贈図書 …… 5
登山医科学委員会の活動について …… 6
遭難対策委員会の活動と地方活動支援について …… 7
富山県山岳連盟自然保護委員会のSDGsな活動はこれから始まる …… 8
第21回 山岳遭難事故調査報告書 その1 …… 9
Enjoy Climbing …… 11
JMSCA、表紙のことば …… 12

ユース日本代表関連 活動報告

ユース日本代表ヘッドコーチ
西谷善子

●ユース世界選手権前強化合宿（三重・伊賀）

2024年7月31日～8月4日にJMSCAゴールドスポンサーのDMG森精機株式会社が運営する「DMGMORIアリーナ」にて、ユース世界選手権に向けて国内強化合宿を行いました。屋内に3種目揃っている施設を利用させて頂けたことで、選手・スタッフともに天候の心配をすることなく合宿に集中して臨むことができました。

私たちは、昨年度からロス五輪を見据え、ユース日本代表の選考方針を単種目毎の選考に切り替えましたが、その影響か、特にU-16・18のカテゴリーで国際大会初出場の選手が多く選出されるようになった印象を受けています。中には、国際規格のルート・課題・ルールに慣れていない選手もいるため、事前強化合宿での取り組みが、選手達が国際大会で結果を残すために重要な役割を果たしていると感じています。

合宿の事前準備から当日、片づけまで施設関係者の方々には、スタッフや選手の話にも丁寧に耳を傾けてくださり、現場の気持ちに寄り添って対応してくださったおかげで、充実した練習ができたことに感謝致します。

●IFSCクライミングユース世界選手権2024（中国・貴陽）

2024年8月22日～8月31日に中国・貴陽でユース世界選手権が開催されました。結果は、金6個、銀2個、銅5個の計13個のメダルを獲得し、今年も国別ランキング1位を獲得することができました。特にジュニアカテゴリーについては、来年からユース世界選手権からなくなることが予定されているカテゴリーなので、選手個々に様々な思いを抱えながら、全力で競技と向き合い、チームを引っ張てくれたことに感謝です。

一方、開催国であった中国と、メダル獲得の総数では並ぶ結果となり（金メダル獲得数で日本が上回った）、他にも様々な国の選手達が入賞しており、昨年よりもさらに各国でユース年代からの強化が活発化してきている様子が窺がえ、日本もユース世代を強化する取り組みを刷新させていかなければならないと感じました。

次のユースのイベントは、11月のアジアユース選手権（インド）となります。引き続き応援よろしくお願い致します。

〈優勝選手からの合宿および大会コメント〉

■通谷律（U-20男子ボルダー優勝）

合宿では自分の感覚のズレを感じることが出来たのでそこを調整できてとてもいい練習になりました。

ユース世界選手権では、最後のユースだったので全完で優勝出来たのは素直に嬉しいです。今後はワールドカップでも表彰台を目標に頑張っていきます！

リード

■長森 晴（U-18男子ボルダー優勝）

DMGMORIアリーナは、特にリードの壁がとても好きでした。高さも壁の形状も課題もホールドもとても良くて、有意義な合宿になりました。

ユース世界選手権では、リードでミスをしてしまい、メンタルの立て直しが大変でしたが、なんとか優勝出来て嬉しかったです。次の目標はジャパンカップでいい順位を獲得し、ワールドカップに出場したいです！

■濱田 琉誠（U-16男子ボルダー優勝）

DMGMORIアリーナで大会のシミュレーションを行って、本番までに改善すべき点が明らかになったので、それはとてもよかったと思っています。設備も最高でいい練習ができました！

今回のユース世界選手権では優勝という結果を残せ

○リード結果

男子			
Under 20（ジュニア）			順位
杉本　侑翼	すぎもと ゆうすけ	近畿大学工業高等専門学校	1位
小俣　史温	おまた しおん	日本体育大学	3位
和田　樹怜	わだ きさと	高知県山岳連盟	8位
Under 18（ユースA）			順位
藏敷　慎人	くらしき まなと	兵庫県山岳連盟	1位
船木　　陽	ふなき はる	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟	3位
長森　　晴	ながもり はれる	N高等学校	7位
Under 16（ユースB）			順位
濱田　琉誠	はまだ りゅうせい	神奈川県山岳連盟	2位
仲田　和樹	なかた かずき	神奈川県山岳連盟	4位
上原　一剣	うえはら いっけん	東京都山岳連盟	7位
宮川　幸大	みやがわ こうた	静岡県山岳・スポーツクライミング連盟	18位
女子			
Under 20（ジュニア）			順位
竹内　亜衣	たけうち あい	筑波大学	5位
永嶋美智華	ながしま みちか	静岡県立静岡西高等学校	8位
小倉　紗奈	おぐら さな	同志社大学	14位
Under 18（ユースA）			順位
麦島　心花	むぎしま こはな	中部大学春日丘高等学校	4位
山　真奈実	やま まなみ	三重県山岳・スポーツクライミング連盟	8位
藤村　侃奈	ふじむら かんな	奈良県山岳連盟	26位
Under 16（ユースB）			順位
林　　有沙	はやし ありさ	石川県山岳・スポーツクライミング協会	1位
中村まりん	なかむら まりん	茨城県山岳連盟	7位
徳嵩　悠乃	とくたけ ゆの	長野県山岳協会	13位

※順位に黄色ハイライト入れているのがメダル獲得選手

ボルダー

たことは嬉しいけど、自分の納得のいくパフォーマンスができずに終わってしまったので、来年は100パーセントのパフォーマンスをして、ボルダーとリードの２つの種目で優勝したいです。

■杉本 侑翼（U-20男子リード優勝）

合宿には参加できなかったため、ユース世界選手権のコメントのみになります。

未だにこの結果を信じられていないのですが、代表権がリードにしか無かった事もあり、初めて本気でリードと向き合った結果がついてきたのだと思います。SNSでもリードの練習を発信せず、ただひたすら勝ちに貪欲になる３ヶ月間でした。

とにかく今目指す目標は目の前のジャパンカップで結果を残し、ワールドカップの舞台で戦う事です。あわよくば４年後のオリンピックも視野に入れていきたいです。

■藏敷 慎人（U-18男子リード優勝）

リードの合宿に参加しました。壁が大きく横幅があるので、他ジムではあまりできない大きな蛇行などの動きができ良い練習になりました。

ユース世界選手権では、ドキドキしながら中国に行

スピード

きました。海外は非日常を感じられて楽しかったです。全力で大会も中国の生活も楽しむことを目標にして挑んだので、優勝と言う結果にはびっくりしました。これがクライミング人生の最高点にならないように、もっと強くなります。

■林 有沙（U-16女子リード優勝）

合宿は代表選手と一緒に練習ができ、沢山刺激を受け充実した時間を過ごすことができました。参加前よりレベルアップし、自信をつけることができました。

大好きなリードでユース世界選手権に出場でき、嬉しかったです。決勝は最終競技者で緊張しましたが、みんなの応援で力を出し切ることができました。

〈獲得メダル数〉

	金	銀	銅	
リード	3	1	2	
ボルダー	3	1	2	
スピード	―	―	1	
合計	6	2	5	13

○ボルダー結果

男子			
Under 20（ジュニア）			順位
通谷　律	かよたに りつ	佐賀県山岳・スポーツクライミング連盟	1位
田宮　瑛人	たみや えいと	日本大学	5位
和田　樹怜	わだ きさと	高知県山岳連盟	18位
松岡　玲央	まつおか れお	同志社大学	22位
Under 18（ユースA）			順位
長森　晴	ながもり はれる	N高等学校	1位
本明　佳	ほんみょう けい	岩手県山岳・スポーツクライミング協会	6位
栗田　瑛真	くりた えま	山形県山岳連盟	15位
Under 16（ユースB）			順位
濱田　琉誠	はまだ りゅうせい	神奈川県山岳連盟	1位
仲田　和樹	なかた かずき	神奈川県山岳連盟	3位
齋木　猛斗	さいき たけと	四日市市立中部中学校	6位
女子			
Under 20（ジュニア）			順位
竹内　亜衣	たけうち あい	筑波大学	13位
小倉　紗奈	おぐら さな	同志社大学	15位
永嶋美智華	ながしま みちか	静岡県立静岡西高等学校	16位
Under 18（ユースA）			順位
村越　佳歩	むらこし かほ	茨城県山岳連盟	2位
小田　菜摘	おだ なつみ	大阪府山岳連盟	4位
小屋松　恋	こやまつ れん	横浜隼人高等学校	9位
伊藤　悠	いとう はるか	茨城県山岳連盟	10位
Under 16（ユースB）			順位
村上　和香	むらかみ わか	京都府山岳連盟	3位
山﨑　彩葉	やまざき いろは	東京都山岳連盟	12位
西川　美愛	にしかわ みあ	徳島県山岳連盟	16位

※順位に黄色ハイライト入れているのがメダル獲得選手

○スピード結果

男子			
Under 20（ジュニア）			順位
三田　歩夢	みた あゆむ	千葉県山岳・スポーツクライミング協会	6位
谷井　和季	たにい かずき	橿原学院高等学校	12位
山本　恭也	やまもと よしや	愛媛県山岳・スポーツクライミング連盟	14位
Under 18（ユースA）			順位
田渕　幹規	たぶち もとのり	上宮高等学校	3位
上柿　銀大	うえがき ぎんた	岩手県山岳・スポーツクライミング協会	8位
大石　覇	おおいし はく	千葉県山岳・スポーツクライミング協会	14位
Under 16（ユースB）			順位
柏　龍弥	かしわ りゅうや	三重県立久居農林高等学校	6位
齋藤　蒼太	さいとう そうた	千葉県山岳・スポーツクライミング協会	7位
石田　観千	いしだ みゆき	福岡県山岳・スポーツクライミング連盟	10位
女子			
Under 20（ジュニア）			順位
林　かりん	はやし かりん	鳥取県山岳・スポーツクライミング協会	6位
竹内　亜衣	たけうち あい	筑波大学	8位
河上　史佳	かわかみ ふみか	鳥取県山岳・スポーツクライミング協会	11位
金谷　春佳	かねたに はるか	鳥取県山岳・スポーツクライミング協会	13位
Under 18（ユースA）			順位
小屋松　恋	こやまつ れん	横浜隼人高等学校	4位
麦島　心花	むぎしま こはな	中部大学春日丘高等学校	17位
Under 16（ユースB）			順位
原　菜都美	はら なつみ	千葉県山岳・スポーツクライミング協会	6位
岡信　葵衣	おかのぶ あおい	岡山県山岳・スポーツクライミング連盟	7位
岡部　朱里	おかべ あかり	千葉県山岳・スポーツクライミング協会	22位

※順位に黄色ハイライト入れているのがメダル獲得選手

スポーツクライミング体験会から

スポーツクライミング部 部長
町田 幸男

９月に入り２つのスポーツクライミング（ＳＣ）体験会が行われた。どちらも主催はスポンサーでJMSCAが後援である。私も都内で実施された体験会を視察し、ジムのオーナー（オリエンタルバイオ様）と話しをする機会を得た。会話の内容は主にJMSCAが向かおうとしている将来についてであった。６月に会長と各スポンサーを表敬訪問した際にも同様の問いかけがあった。これは登山、ＳＣどちらにも言えることだが、JMSCAは５年10年先を見据えたより具体的な目的、目標を掲げるべきではないだろうか。

ＳＣは現在オリンピックを頂点とした競技体系が確立されつつあるが、その形態はいわば尖った二等辺三角形と言える。野球やサッカーなどメジャーなスポーツ並みに盤石な体制、つまり大きな正三角形にするためには今以上に底辺の拡大が必要である。喫緊の課題としては小中学生への普及が考えられる。具体的には現在約60万人と言われている競技人口を100万人にまで増加させる数値目標を掲げたい。体験会はその布石になるに違いない。普及活動の一環として積極的に取り組んでいきたい。11月には山梨県甲府市で地元ロータリークラブ様からの依頼、12月には８月台風により中止となった愛媛県西条市で日新火災様からの依頼によるJMSCA主催の体験会を予定している。

今JMSCAに求められていることは何なのか、理事をはじめ関連の皆さん考えてみませんか。

◆住友商事様クライミング体験会

2024年８月30日（金）～９月１日（日）の３日間。神奈川県辻堂にあるテラスモール湘南にて、住友商事株式会社様主催の「スポーツクライミング体験会」が開催されました。

台風が接近するという生憎の天候の中での開催となりましたが、オリンピック効果もあってか、大型ショッピングモール内に設けられたイベントブースには、多くの人たちが集まり、各回とも予約枠が満員となるほどの大盛況！「あ！オリンピックでやってたやつだ」「やりたい！」「あそこまでいけるかなぁ」とワクワクと緊張の中、たくさんのキッズ達が、真剣な目でゴールに向かっていた姿がとても印象的でした。

また、それと同時に、このような普及イベントを重ねていくことで、スポーツクライミングの底辺が広がっていくことを体感し、JMSCAとしても、更なる努力が必要だと実感したところです。

メジャースポーツになるのはまだまだ時間がかかりますが、これからも協賛スポンサー様と共に、スポーツクライミングの普及に努めていき、次のオリンピアンを育てていきたいと考えています。

スポーツクライミング部　副部長　栗田 季慎子

◆オフィシャルスポンサーによる体験会

９月26日（木）に都内のクライミングジムFish and Birdでマスコミ向け体験イベントが開催されました。

主催はJMSCAオフィシャルスポンサーである「牛乳石鹸」様と「オリエンタルバイオ」様です。講師として２社共通のサポートクライマーである森秋彩選手と東京オリンピックのメダリスト野口啓代さんの二人が参加し、日本テレビ、テレビ朝日、ＴＢＳをはじめマスコミ15社から集まった初心者にクライミングをレクチャーしました。今回は日頃取材する側の記者の皆さんが二人のオリンピアから直接指導を受けるという初めての試みのイベントで、大いに盛り上がりました。体験会の後は二人を囲み、パリでの大会の様子など和気あいあいと取材が進みました。今後のスポーツクライミングの露出が楽しみなイベントとなりました。

マーケティング委員長　小田部 拓

2024年度山岳共済会事業

安全登山講習会報告

主 管：山口県山岳・スポーツクライミング連盟
日 時：2024年6月23日（日）9時～16時
場 所：山口県セミナーパーク　大研修室

【報告内容】

山口県山岳・スポーツクライミング連盟では、夏山シーズン前に、初級から中級レベルの加盟団体員と一般登山者を対象とした安全登山講習会を開催しています。この講習会は2009年7月に北海道トムラウシ山麓で発生した遭難事故を教訓とすべく始めたものです。当初は連盟加盟団体員を対象にした伝達講習からスタートしています。その後、講習対象を一般登山者や高体連登山部員にまで広げ、講習内容も基礎的なレスキュー技術など夏山での安全登山に役立つと思われる幅広い登山技術について、講習内容を毎回見直すなど試行錯誤しながら、継続してきました。

今回は、山口県警察本部地域部の方にもご出席いただき、最初に警察からのお願い事として『安全で楽しい登山を』と題して講じていただきました。98名の受講者がある中、初めて受講する方がほとんどですが、リピーターの方にも知識の幅を広げていただくために講習内容は毎回見直しを行っております。

特に今回は、前回まで実施していた「応急処置や搬出法」、「レスキューシートやツェルトの利用方法」、「ロープワーク」などの実技講習に代えて、「熱中症と低体温症」、「登山アプリ利用の利点と注意点」、「登山計画書の作成や登山届」について座学での講習を行いました。座学とはいえ、「登山計画の作成」と「読図」については、グループワークを行いました。受講者には好評でしたが、一方で、受講者が登山の初心者から中級者まで登山の力量が幅広いためか、理解度に大きな違いがあることに気づかされました。これまでも受講後「講義内容はすべて知っていた」が、「実践できる自信はない」などの意見が少なくありませんでした。分かったつもりでいる方に正しく理解していただけるようにするためには指導方法の工夫も必要ですが、繰り返し受講していただくことを推奨したいと思いました。

全国の山岳遭難者数の増加傾向に歯止めがかからない状況です。遭難救助の現場の声として、遭難事例から、「事前準備や体力が不足している」、「偏った情報を頼りにしている」といった指摘もあるように、多くの登山者は、ネットやスマホの発達により膨大な情報を入手し、いろいろなサービスを利用できる環境にありながら、それらを自らの登山力量の向上に役立てていないようにも感じられます。また登山装備の高機能化がトレーニング軽視、体力不足につながっている面も否めないようにも思います。

これからも登山を取り巻く環境や登山者の考え方は変化し続けると思います。その変化を正しく把握して、それらを踏まえたうえで、地方で活動する登山者の登山の安全にお役に立つような登山の考え方や登山技術を伝える取り組みを続けていきたいと考えています。

山口県山岳・スポーツクライミング連盟
遭難対策委員長　江本 正彦

寄贈図書

（株）日本運動具新報社	「スポーツ産業新報」第2444号、第2445号	新聞
（公財）健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No. 557	会報
日本トレーニング指導者協会	「JATI」第102号	会報
（株）山と渓谷社	「ROCK & SNOW」No.105	月刊誌
（株）山と渓谷社	「関東周辺の山ベストコース100」	寄贈本
（公社）日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.415	会報
Corean Alpine Club	「산（山）」2024年8月号 Vol. 286号	会報
（株）山と渓谷社	「山と渓谷」2024　10月号 No.1083	情報誌
おいらく山岳会	「山行手帖」No.778.'24. 10	会報
（公社）日本山岳会	「山」2024年（令和6年）9月号　No.952	会報
（公社）日本山岳会	「山岳」2024年 Vol.119	会報
中華民国山岳協会	「中華山岳」季刊 297	会報
（一財）日本スポーツマンクラブ財団	「日本スポーツマンクラブ財団会報」第179号	会報

登山医科学委員会の活動について

登山医科学委員会　委員長　中島隆之

登山医科学委員会の活動について皆さんにご紹介いたします。当委員会は、①安全登山啓発活動、②インターハイ登山競技・SKIMO大会の救護、SKIMO選手体調管理、③登山全般の医科学的研究を担当しています。そして、８つの事業に委員を派遣しています。

１）山での応急手当講習会

2023年度から開始した、当委員会が主催する事業です。年に１回、神奈川県立山岳スポーツセンターで２日間かけて山中での応急手当方法について座学、実技にて講習しています。実際に山で救護の経験がある国際山岳医たちが中心となり応急手当のコツを教えています。昨年度は16名が受講し、講習後のアンケート調査では13名から回答がありました。講習内容については13名中12名が満足、スタッフの対応については11名が満足という回答でした。満足度が高かった理由としては多数の医師たちに気軽に質問できたということが影響していました。

２）夏山リーダー講習会（基礎編）

基礎編の中の「セルフレスキュー」、「登山運動生理学」を担当し、座学・実技で講習しています。

３）夏山リーダー講習会（上級編）

実際の遭難場面を想定したシナリオトレーニング形式で滑落による外傷、低体温症などへの対応方法を講習しています。

４）夏山リーダー講師養成研修会

基礎編の講師を養成するための研修会で、東京と神戸でそれぞれ年１回開催しています。

５）無雪期レスキュー講習会

６）積雪期レスキュー講習会

遭難対策委員会が主催する上記２つの講習会に参加し、無雪期、積雪期それぞれの時期の傷病に対応する応急手当について講習しています。

７）インターハイ登山競技の救護

2018年の三重大会から登山中の救護を担当しています。現在は登山医科学委員会からは医師２名、看護師２名を派遣し、地元の医師、看護師とチームを作り救護活動をしています。救護チームは選手帯同スタッフと本部救護所スタッフに分け、登山医科学委員会委員は選手帯同スタッフとして活動します。帯同スタッフは点滴セットなどの救護物品を持参し、現場で応急処置を施行します。そして、要救護者は病状や処置内容を記載した記録用紙と共に選手支援担当者と一緒に下山してもらいます。８月という暑い時期に開催される大会であるため毎年、脱水症や低Ｎａ血症の傷病者が多く発症するためその対策を検討中です。

８）SKIMO日本選手権大会の救護、強化指定選手の体調管理

大会会場にて傷病者が発生した際に、応急処置が可能な体制としています。

また、強化指定選手の合宿中などの体調管理を行っています。具体的には、アスレチックトレーナーに、合宿中の選手のボディケア・トレーニング指導・ストレッチ指導・姿勢やバランス評価と改善方法の指導・栄養講習を中心にタイム測定やホイッスル吹きなど練習での補助、ＪＩＳＳ（国立スポーツ科学センター）では更にスポーツクリニックでの受診に対するアドバイスなども行っています。

2023年度までは24名のスタッフで上記事業を手分けしておこなってきました。しかし、人手が足りなくなり2024年度は５名増員し医師18名、看護師６名、理学療法士４名、その他１名の総勢29名で各種事業に取り組んでいます。

応急手当講習会（屋内）

シナリオトレーニング（屋外）

福岡インターハイ救護チーム

遭難対策委員会の活動と地方活動支援について

遭難対策委員会　委員長　服巻辰則

遭難対策委員会は、無積雪期と積雪期のレスキュー講習会が、主な活動として知られていると思う。講習会は、講師スタッフと受講生とで関わる人数も多く、予算的にも遭難対策委員会のメインの活動となっていることには違いない。

しかし、講習会が「事故に対する事後対応」が主であり、これに対して遭難しないための施策、つまり「減遭難活動」の必要性が指摘されてきた。積雪期の講習会では「雪崩事故に遭わないための講習のクラス」を設けているが、これを拡大すると登山教室となってしまって遭難対策委員会としては取り組めなかった。

このため減遭難活動として、ここ数年で登山道における道迷い対策と登山届の提出促進などを減遭難活動として取り入れてきた。いずれの活動も講習会に積極的に参加してこない登山者層の減遭難にも繋がると考えている。

道迷い対策は、地方連盟・協会の活動を期待してJMSCAとしては支援を行うこととし、登山届提出促進はJMSCAと地方連盟・協会のそれぞれで取り組むべきと考えている。

JMSCAの登山届の提出促進として、JMSCAのホームページに簡易版登山届を作成して掲載している。これは従来の登山計画書の記載項目が多岐にわたり、作成にそれなりの労力が必要なことから、登山届として遭難時の捜索救助のための必要な情報に絞ることで記載項目を極力減らしたものである。この簡易版登山届のフォーム作成に当たっては警察庁や消防庁の意見も取り入れて作成しているため、安心して気軽に利用できるフォームとして利用してほしい。

登山届の提出をさらに促進するためにオンラインで登山届を提出する「コンパス～山と自然ネットワーク」を運営する山岳安全対策ネットワーク協議会に参画し、協定未締結府県の解消の活動を行うなど、登山届提出環境の整備も行っている。具体的には遭難対策委員の働きかけで、岩手県、山形県、広島県においてコンパスで登山届が提出できるようになった。

地方の減遭難活動の支援事業

JMSCAの遭難対策委員会では、委員の人数や居住地・活動地の制約から全国的な減遭難活動は困難である。そのため、地方の協会・連盟が実施する減遭難活動に対して費用面等で支援を行い、これらの活動を促進する事業を行っている。

支援の対象とする活動は多岐にわたり、今までの実績として登山道における道迷い対策として登山道整備や道標整備の実施、登山口における登山届提出促進活動、登山届提出用ポストの設置などが行われている。いずれも地方連盟・協会の単体ではなく、地元の自治体・警察・消防と協力して実施されていることが多い。

支援としては、予算状況、新規・継続支援か、活動内容によって、5～20万円の資金補助が可能となっている。既に、大阪府、兵庫県、三重県、東京都、山梨県、鹿児島県に対して支援実績がある。

地方講習会講師派遣事業

遭難対策委員会で開催している講習会は、無積雪期は富山県立山町の国立登山研修所で、積雪期は群馬県水上町の土合山の家でと固定して開催している。

講習開催地を固定することで、主催者側としては開催地の施設の状況が明確であることから安定した講習内容を提供できるメリットがある。しかし、開催地から遠方に居住する参加者希望者にとっては時間的・費用的に負担が大きくなり、参加の障害になっているものと考えられる。

地方在住者の受講機会提供のため、地方連盟・協会が開催する講習会にJMSCA遭難対策委員会の講師を派遣する事業を実施することとなった。地方連盟・協会からの講習内容の要望に基づいて適任な講師を1～2名派遣するものである。講師への謝金・日当（規定額：1.5～2万円／人日）のご負担を地方連盟・協会にお願いすることになるが、講師の交通費・宿泊費は全国どこであってもJMSCA負担としている。開催した講習会で参加費を徴収する場合は全額地方連盟・協会の収入としているので、この中から謝金・日当を捻出していただければ実質負担はなくなると思われる。

講習の形は、地方連盟・協会の講習会の講師陣など指導者クラスへの講習でもよいし、地方連盟・協会主催の一般向け講習会の講師としてでもよい。1日目に地元のスタッフ向け講習、2日目に一般参加者向けの講習という形も考えられる。

なお、派遣は遭難対策委員会の常任委員か専門委員に限られており、講習会において外部講師をお招きしているファーストエイド、雪崩ネットワークとの共催である積雪期クラス1の内容については、本事業の対象外となる。

＊

地方減遭難活動支援及び地方講習会講師派遣事業とも、希望する都道府県連盟・協会があれば、JMSCA遭難対策委員会へ気軽にご相談を。

富山県山岳連盟自然保護委員会のSDGsな活動はこれから始まる

富山県山岳連盟自然保護委員会の活動は、他県のものとはやや異なっています。最大の活動は、1972年から始まり今年で47回を迎える「県民登山教室」です。今回の県民登山では、今年が辰年であることにちなみ、「龍」のつく山の中で一番高い「龍王岳（2872ｍ）」を目指しました。登山経験の少ない方から大ベテランの方まで、和気あいあいと全員で励まし合いながら無事登頂を果たしました。今年から北アルプスの富山県側で試験的に導入が始まった「登山道維持協力金制度」にも賛同し、協力金も納入してきました。

もう一つの活動は2006年から始まった「自然保護セミナー」です。これまで、富山県内の山の特徴やその素晴らしさ、野生生物との共存、自然保護の大切さ等について、専門の先生方にご講演いただき、参加者全員で話し合ってきました。昨年富山県内でクマによる死亡事故が発生したことを受け、今年は野生生物、特にクマとの共生について考えていく予定です。

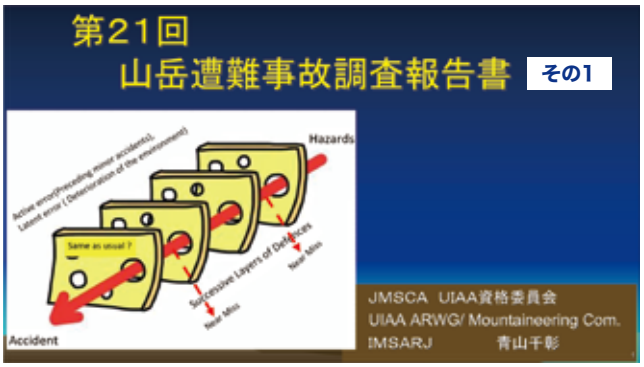
自然保護委員会の活動というと、登山道の整備・維持や植生の保護・復元を思い浮かべる方が多いと思われます。これまで富山県山岳連盟自然保護委員会ではそのような活動には取り組んできませんでした。地域に根ざした低山では伝統的に各地域の山岳会が整備や草刈りなどを行ってきましたが、山岳連盟としてはノータッチでした。まずは登山道整備の実態を調査し、一覧表にして可視化することから取り組み始めています。

富山県の北アルプスでは、登山道荒廃の問題が顕在化してきています。たしかに立山（雄山）への登山道は登りと下りが明確に分けられ、たいへん歩きやすくなりました。一方で、北アルプス屈指の名峰・薬師岳に向かう登山道の荒廃が問題視されています。我々も少しでも登山道整備・維持のために尽力したいと思い、環境省や富山県自然保護課とも協議を始めています。多くの人々がこれからも安全で楽しい登山を続けられるよう、富山県山岳連盟自然保護委員会は活動の方向を転換しつつあります。

（富山県山岳連盟　自然保護委員長　金川千尋）

自然保護セミナー

県民登山



Pit Shubert氏を偲ぶ

「生と死の分岐点」の著者ピット・シューベルト氏が2024.3に89年の人生を終えた。

1968年からＤＡＶドイツ山岳会に安全委員会を発足させ、続けて、ＵＩＡＡの安全委員会（1973－2004）での委員長を勤めた。事故の原因を分析・研究し、技術材料を徹底的にテストすることで、登山用品のＵＩＡＡ規格を確立することに成功した。彼の安全に関する研究成果は、数え切れないほどの事故を防ぐのに役立ち、今、その足跡は、私達が利用する様々な登山用具の安全性を保証するＵＩＡＡ安全ラベルに見ることができる。

当事故報告書もPit氏と安全登山研究仲間からの支援を頂き作成してきた。深く感謝すると共に、心からご冥福をお祈りする。

主な流れ

１章　ＵＩＡＡのＡＲＷＧ（Accident Reporting WG）について
２章　「安全登山のための登山道を考える」シンポジウムより概要紹介
３章　山岳団体（JMSCA、労山）の組織情報と事故調査
４章　レジャー白書から見た登山活動
５章　2023年　警察庁の事故データ分析
６章　山岳遭難事故データベース分析結果
（新規登録282人の特徴）
4.　女性事故者急増に関する事例分析
７章　4951人のデータ分析から見た山岳遭難事故の構造
7.2　山岳遭難事故に至る直前までの関連要因の抽出と分析

１章　UIAAのARWG（Accident Reporting WG）について

山岳遭難事故発生状況を世界的規模で、入手できる範囲内から推測すると、毎年膨大な数（５万件以上）の事故が発生していると考えられる。しかし、警察庁の山岳事故統計のような全国規模での統一した手法で、調査を実施する国あるいは山岳組織は少ない。

欧米で、よく見られるケースは１国にある複数の山岳組織で実施するため、調査項目に統一性がなく、国全体で集計しようにも発生する事故件数でさえ、掴めないのが実態である。

このことは、国と国の山岳事故比較も同じ事が言える。世界レベルで統一した調査項目がないため、既に山岳事故データベースを構築している国家間での比較が難しいのである。

さらに、主題である、accident, incident, near-missでさえ、統一された用語の定義がない。その結果、データ比較の際、「事故件数」はTotal incidentsか Total accidentsか迷う事になる。我国の医療機関では、インシデント＝ヒヤリ・ハットと捉えるケースが多いが、欧米の山岳事故統計では、インシデントをレスキューが出動した事故全般と捉え、「道迷い」から「転倒・滑落」などの傷害者、死亡者も含めている。

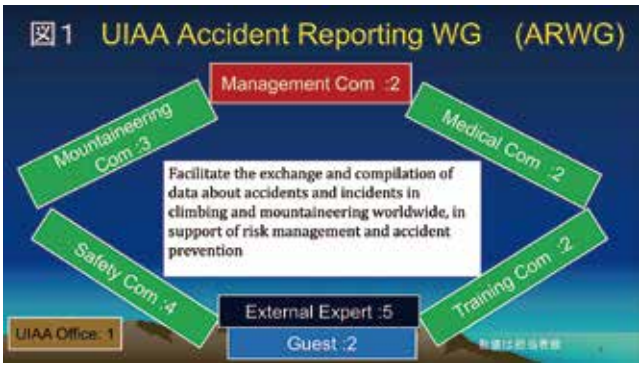
一方、登山は複雑系と言われるように、１つの事故に関連する因子があまりにも多く、地形・地質、天候、医療、心理、教育、用具の安全性と使用法など多分野に及ぶ。加えて、登山環境は時々刻々変化する結果、事故を再現し検証することができない。

膨大な数の事故が発生し、多くの方が亡くなるにもかかわらず世界的に見て、山岳事故調査機関、研究者が非常に少ない原因は、このような背景に起因している。その結果、国際山岳連盟ＵＩＡＡ でさえ、長い間本格的に取り組むことはなかった。

そこで、ＵＩＡＡ では、「①リスク管理を支援するため、世界中の登山事故に関するデータの交換と収集を促進する。②登山事故原因に関するより多くの、よりよいデータを得るために、加盟団体が互換性のある事故報告システムを開発し、実装することを支援する」との目的を設定し、2022年よりＡＲＷＧ（Accident Reporting Working Group）として活動を開始した。

ＡＲＷＧの大きな特徴は図１に見られるように、５委員会代表と外部の専門家など様々な領域20名から構成されることである。現在、目的に沿った18課題を設定した活動を行っている（成果事例：図２）。

これの活動から得られる成果を我国に適用すると、一方向から見ていた登山事故を、別角度から観察するきっかけになることが期待される。



２章　「安全登山のための登山道を考える」シンポジウムより概要紹介

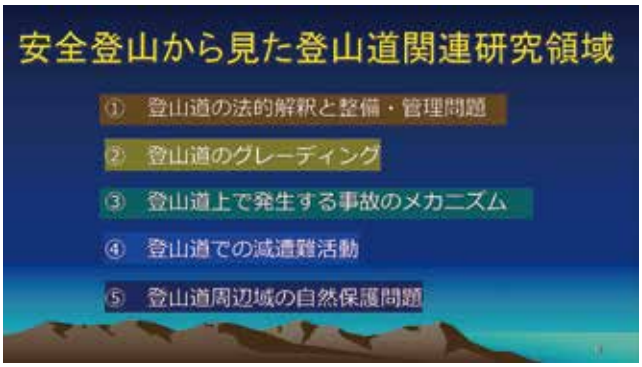
副題「減遭難問題と登山道法について」

主催　日本山岳 SAR 研究機構（IMSARJ）

共催　JMSCA、労山、協賛　日本山岳文化学会

「安全登山を考える上で、「登山道問題」は最重要課題であるが、広大な山域に おける様々な地権問題、整備・管理問題を抱えているため、取り組みが難しい研究領域である。加えて、利用する登山者の能力と登山道リスクも、地形的特徴に伴う難易度判定が複雑なため、十分な研究がなされていないのが現状で ある。」

９／７に開催された「登山道問題」シンポジウムは、当報告書に関連して重要な内容であるため、その一部（①～⑤）を紹介する。



①「登山道の法的解釈と整備・管理問題」

登山道法研究会が中心となって　命題「登山道は誰が整備し、誰が管理しているのか」に対し、様々な観点からアプローチし、大きな成果を出してきた。

その取り組みには、

1）登山道の理念、形態＊と整備状況、利用状況

　＊形態（登山道、自然歩道、探勝歩道、遊歩道）など

2）登山道の管理責任

3）登山道整備の現状、整備費用

4）トラブルや事故の発生状況と判例

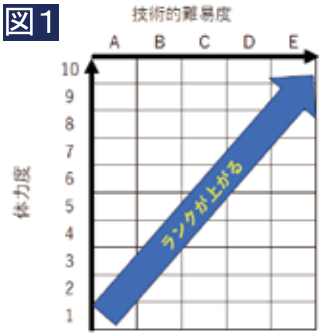
5）法整備化の必要性

②登山道のグレーディング

「山の難易度を客観的に分かってもらう」として、グレーディングが長野県より提案され、10県２山域に広がり、登山道の難易度を表す手法として定着した。

山本式を用いたルート定数を算出し、10段階に分けた「体力度」を、右図の縦軸とし、横軸に山道の状況から登山者に求められる技術・能力を「技術的難易度」として５段階表示したもの。登山計画の段階で、「自分の実力に見合った登山」を検討する資料として、非常に優れた特徴を持っている。

図1



一方、欧米に目を向けると、地域に応じた登山道評価法が利用されており、ＵＩＡＡのパーティやリーダー能力に応じたルート評価、地形からハイキング形態に応じたSwiss Alpine Club Scale、また米国のＹＤＳと登攀レーティングなどがある。

③登山道上で発生する事故のメカニズム

事故のメカニズムについては、研究数が少ないが、IMSARＪがまとめている山岳事故データベース（2024年現在：登録4951件、JMSCA＋JWAFの事故データより）を用いた分析結果より得られた事故の傾向とメカニズム研究がJMSCAのＨＰに毎年報告されている。

（JMSCA山岳事故調査報告）

https://www.jma-sangaku.or.jp/sangaku/safe_climb/report/

事故分析結果によると、「大半の登山者は慎重で、無理をしない」ため、自分の能力に見合わないルートを選ばない、そのため危険と思われる環境条件下では、事故発生数が少ない。大半の事故要因は、ヒューマンエラーが関係していると考えられる。

④登山道での減遭難活動

「減遭難活動」は2013年ごろ、山岳事故の約半数を占める「道迷い」を数量的に減らす目的で始まった。平行して、JMSCAでStop the 1000のキャンペーンが始まり、モデル地区大阪、兵庫、奥多摩が設定された。その後、対象も転倒、滑落などに広がり、今日に至っている。グレーディングも計画段階から事故リスクを下げるという点では減遭難活動の一環であろう。

一方、女性高齢者の転倒･滑落事故の急増を受けて、「転倒滑落停止研究会」が発足し、一定の成果を得、事故の予防に有効なトレーニング法を提案している。

⑤登山道周辺域の自然保護問題

自然保護問題は、研究領域が広いため、シンポジウムでは取り上げなかったが、①～④と密接なつながりがある。

スイスでは、歩行路とハイキングロードに関する連邦法（ＦＷＧ）の第４条　第２節があり、「ハイキングロードは、展望台、名所旧跡、自然　の中へ導くとともに、すべての地域に立ち入られることがないように、ハイカーの通り道を示すように努めている。つまり、人間による過度の負担から自然を保護する手助けをしている。」この考えは、他の欧米の国々も共通しており、登山道とReserved area うまく組み合わせて登山道を取り扱っている。

自然保護は登山道問題解決のKeyとなっている。

次回へ続く

Enjoy Climbing

連載④　パチンコ2024の記録

上野 はるか

●1月3日～1月6日

南岳小屋～槍ヶ岳～北鎌尾根～葛温泉

４時に南岳の避難小屋を出発し、７時前には槍ヶ岳山荘に到着した。南岳小屋からの稜線は昨日とは全然違うたおやかな尾根で、安心して歩けた。ただ、のっぺりしているから視界がないと歩きにくそうだ。疲れている気持ちはないし、道としては歩きやすいのだが、なぜかすぐにハァハァしてしまった。その日の日記に「体が思うようにいかない、これは初めての体験」と書いてあった。

槍の避難小屋で小休止してお茶を飲んだ。西稜は名残り惜しかったが、やはり明日の大量降雪予報が怖くて北鎌尾根に向かう。山頂から３回ほど懸垂して、20m程持ってきていた捨て縄がもうあと１回分くらいになっていた。懸垂が終わり歩けるようになったところで下から登ってきたパーティに出会った。２チームいた。ありがたいトレースをたどって独標を降りきったコルまで進む。

私は独標の下りで、保坂がノーロープでクライムダウンできた箇所がどうしても怖くて降りられなかった。長く一緒に登っているが、これは初めてのことだった。保坂が私よりも後ろにいるならお助けスリング１本出せば一瞬で解決する一歩だが、下降中に私より前を歩いている人が後続の私を助けることは簡単にはできない。それがよく分かっているから、これまで沢登りや岩登りも含めて誰と登ってもこんなケースは無かった。でもこのギャップは２、３回試みたがどうしても最後の見えない一歩を出せず、情けなく申し訳ないが「降りられないからロープが必要だ」と申告する。保坂はすぐザックを下ろし支点を作ってロープを出してきてくれた。もちろんロープを出すと言っても上から吊られるわけではないので、私のやる動きは同じなのだが、万が一ちゃんと着地でずに滑落すると絶対に死ぬ斜面なので、私がロープに繋がって確保されていることが大事なのだ。

その後も慎重に下りながらも、あの判断は相方が彼氏だから甘えていたのか？　他の人と組んでいたらどう判断したんだろう？　でも、自分の心の底からのアラートを無視するのは良くないはずだ、私はより慎重な人間になったのか？　など色々考えてしまった。

その日は15:30にはテンバを決めて、ブロックを積んだり、雪が溜まるための溝を掘ったり、翌日の暴風雪に備えた。

１月４日は予報通りの強風と大雪だった。夜から出発までに１人２回テントを出て雪かきした。今回はパイネのGライトというシングルウォールのテントで来たが、こう大量に雪が降っていると前室があるテントはいいなと思う。入り口を開け閉めする度に結構な雪が入ってくる。

雪が弱くなってきたので11時頃に出発する。独標より先は思った以上に尾根が複雑だった。これは前日まであったトレースが全くリセットされているからそう感じるのもあるだろうが、実際に紛らわしい枝尾根があるし、尾根の上から下を覗きこんでも最低鞍部が見えないので、懸垂下降の方向を間違えることが多々あった。尾根の上から次に登るべきピークは見えるのだが、その間のコルが見えないと結構難しいんだなと思った。懸垂の方向に毎度悩んだ。繰り返す懸垂で捨て縄がつき、誰かの残置してある捨て縄を回収して使いはじめた頃、ポツポツ木が出てきて、懸垂支点をどこにするか問題が少なくなって、プレッシャーも減ってきた。

北鎌尾根下部

この辺りは私のルート選択よりも保坂の方が上手いなと思う時が何度かあって経験の(センスの？)差を感じた。トレースがあったら全然迷わなかっただろうけど、自分の弱点に気付けたから良かった。考えてみると、私はそれほど雪稜を下降した経験はない気がする。今後の海外の山を考えると、下降の力も重要だろう。

この日は目指した千丈沢まで降りられず、北鎌のコルを越えてＰ６の先まで。結局沢に降りてきたのは５日昼頃だった。ここからじつは私が１番怖かった渡渉の繰り返しが始まる。保坂が昔お正月の北鎌尾根に登った時、友人が胸まで浸かっていたとよく話していたので恐怖しかなかった。チビな私としてはこのパートに対してかなりビビっており、緊張のせいか気持ちが悪かった。結果としては膝上くらいだったし、大体の渡渉ポイントにはピンクテープがあった。でも水俣川終盤の渡渉で油断してアイゼンをズボンの裾に引っ掛けて転んで腰くらいまで濡れたのは最悪だった。真冬にパンツまで濡れて歩く経験は、皆さんあんまりしたことがないだろう。５日は薄暗くなってやっと湯俣川出合いの吊り橋が見えた。ヘッドライトで無名小屋まで行き、湿っぽい避難小屋で最後の夜を明かした。翌朝葛温泉までの水平道をとぼとぼ歩き、６日の午前中にようやく長い旅が終わった。

この山行を終えた直後からも私の気力や体力は充実していて、５月のアラスカ遠征に向けて心身ともにうまく進んでいける気がした。が、遠征から帰ってきて生理が来ないな、非日常の２週間を過ごしたしなぁ、なんて思っていたら、なんと妊娠していたことが分かった。様々な葛藤を経て産むことを決意した私だが、今後は「家庭か山か」という究極の問いに対して、自分なりの答えを模索していき

たい。自分が進めてきた遠征計画は必ず１年後の秋にやるつもりだし、今私の隣で眠るパチンコ2024の３人目のパートナーとも、うまくやっていくつもりだ。

３日前に生まれた私の娘は、自分の強い意思と力でこの世に降りてきた存在のように感じる。厳冬期の北アルプスでも成長を続け、その後も春まではアイスに壁に山スキーに、妊婦としてあるまじき行動をしてきた私の中で、よく育ってくれた。保坂と２人でこの子の誕生を受け入れた時、どちらともなく、名前は「あきら」だね、と呟いた。若くして厳冬期の北鎌尾根に散った松濤明の命のエネルギーと、この子の産まれようとする力が、同じように尊く輝いて思えた。

槍ヶ岳山頂

JMSCA 令和６年度 第８回 理事会報告

○**日　時**：令和６年９月12日（木）
14：00―17：30
○**場　所**：ＪＳＯＳビル３Ｆ会議室３
○**出席者**：蛭田会長、古賀・吉田各副会長（議案第７号から離席）、小野寺専務理事、赤尾・野村・町田各常務理事、小髙・小田部・佐藤・島田・中島・中橋・西谷（議案第６号から離席）・畑中・濱田・樋口・前田・望月各理事、以上21名
佐久間監事、古屋監事　以上２名
○欠　席：平田・杉本理事　以上２名

１．開　会

２．蛭田会長からの挨拶

ＵＡＡＡ30周年記念事業、オリンピック事業も無事終了、メダルも取れたので成功といえるのではないか。スポンサーの皆様からも、一緒になって上昇気流に乗るようにしましょうといわれている。スポーツクライミング、山岳、スキーモ事業の目標達成、理事の改選、３－５年後のＪＭＳＣＡをどうするかなど、課題はあるが、着々と進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

３．会議成立状況報告

理事数　開始時23名中21名出席（定款第33条、定足数＝12名（１／２超）
監事数　２名出席

４．議長選出

蛭田会長が議長を務める（定款第32条）。

５．議事録署名人

会長及び監事（定款第34条）

６．議　題（注．審議順に記載）

議案第１号：議事録の承認について（前回第７回の議事録について承認済）

賛成21名、反対ゼロ、棄権ゼロ

議案第２号：補正予算途中報告について

濱田理事が口頭で現状の説明をした。９月の財務委員会で、財源の確認はされた。登山、独立委員会、事務局の支出について削減可能か検討をすすめている。来月には、補正予算の審議をお願いする予定。

議案第３号　基金の確認について

事務局長が口頭で、現状400万円の申し込みとなっている。他岳連からも、今後申込決定のところがでてきている。

議案第４号　博報堂ＤＹスポーツマーケティングとの契約について

町田ＳＣ部長が配布資料をもとに説明した。今後は、交渉についてマーケティング委員会に依頼予定。以下のように異議なく承認された（９月13日付の契約）。

賛成21名、反対０名、棄権０名

議案第５号　大阪府岳連からの申し入れについての状況

返答は、すでに送付済（８月15日付）。その後、大阪府岳連からは、特に質問等は来ていない。

議案第６号　理事会議事録、報告の配布方法について

赤尾事務局長が、配布資料を基に説明した。理事会議事録の承認後、理事会報告用のまとめ（月報掲載と同じ内容）を早く作成し、ＨＰに掲載後、そのアナウンスを岳連正会員にメールに添付して発信すれば、理事会開催後３週間前後で伝達できる。報告用のまとめには副会長にもチェックいただくことを前提として当配布方法の提案について採決をとり、承認された。

賛成21名、反対０名、棄権０名

登山月報の配布方法の改善について

岳連での煩雑な作業と、費用の２つの問題がある。月報の最終的なシステムでの公開方法はPDFによるHPでの公開方法で、すでにできている。その後以下の意見が出た。

＊登山月報の中止や、発行頻度を減らす案もある。
＊印刷停止の場合には、スポンサー料金に影響が出るかも確認が必要。
＊現行方法に限らず、ＳＮＳを利用した方法の検討も必要である。

当面、岳連の意見を収集するために、アンケートを送付する。前田理事、小髙理事と事務局で作成し、以下の日程で行う。

９月27日（金）までアンケート作成、９月30日（月）アンケート配布。10月31日までに回答を受領。11月14日（木）理事会で、最終方針決定。

上記日程案ついて採決し、以下のように承認された。

賛成20名、反対０名、棄権０名（西谷理事離席）

議案第７号　マーケティング委員会の今後の在り方について

小田部理事が配布資料を基に今後行うことの説明をした。具体的には、スポンサー獲得のための情報共有、各種補助金申請のとりまとめ、新たな財源獲得のための活動、行政のふるさと納税制度の活用、各岳連との協調営業及び広報活動全般などを行う。直近では、新宿区わがまち応援寄附金制度を活用した募集を行う予定。

また、今後は、登山、ＳＣ，スキーモにも対応することから、今期は、組織図は変えないが位置づけを検討する予定。上記の内容について採決し、以下のように承認された。

賛成19名、反対０名、棄権０名（吉田副会長離席）

議案第８号（追加議案）総会後の課題（2022年度理事会の責任）について

蛭田会長が標記の問題提起を行い、以下の協議をした。

＊責任、けじめのつけ方の日程案の検討
＊ガバナンス委員会での検討
＊倫理規程、処分規程等の変更検討
＊文書を残すこと（再発防止のための）の検討
＊令和６年度理事会として宣言文を作成、提示する方法の検討

今後は、三役で素案を作成し、常務理事会、監事に諮って、次回10月の理事会で提案、採決することになった。

議案第９号　スキーモ日本代表チームに関わる選手規程、ユニフォーム等運用規程の提案について

小野寺専務理事が説明。当規程の承認は、ガバナンス委員会の審議をへて、理事会で承認するというのが本来の手順であるが、選手派遣の決定が10月でなければならず、その手順では間に合わないので、当規程の承認を、理事会から常務理事会に委任してもよいかという提案を行った。その後、以下の意見が出された。

＊今までは、ＳＣで来っている規程を準用していた。
＊派遣する選手を決めるためならば、ＳＣの規程を踏襲することで可ということを理事会で決めるという方法も取れるのではないか。
＊規程自体は、後日、ガバナンス委員会での審議を経て、理事会で決定した方がよいのではないかという意見が出された。

この結果、今提案は取り下げとなり、派遣選手の決定は、ＳＣの規程を準用し、常

務理事会によるメール承認となった。

７．報　告

報告第１号　月次報告、キャッシュフローについて

赤尾事務局長が、画面から説明した。キャッシュフロー自体は、前月の試算と同様の予定。令和６年度の予算に対しての執行割合は、８月末の５か月で46％となっている。ＳＣ強化の執行割合が多くなっている。

蛭田会長が、アジア山岳連盟30周年の収支状況を説明した。

当事業は、便宜上、国際ＡＣ委員会に、収支の数値をいれてある。

報告第２号　日山協山岳共済会保険料について

小野寺専務理事が、2025年度の割引率が46％から37％引きになり、その理由が事故率増、加入者数減であることを説明した。

報告第３号　委員名簿について

小野寺専務理事が、ＳＣ部、登山部、独立委員会について、常務理事会で承認された内容を画面に表示して説明した。

報告第４号　派遣役員確認について

小野寺専務理事が口頭で、国内外への派遣状況を説明した。ＪＭＳＣＡ役員でない人の外部派遣はやめたほうが良いと考えている。日本スポーツ協会の全国指導者連絡会の委員として年２－３回会議に参加している。

報告第５号　ガバナンス年１回のWeb確認について

小野寺専務理事が、ＨＰ上に進捗状況を10月末までに報告することになっていることを伝達した。

報告第６号　令和６年度上期総括案について

小野寺専務理事が、10月に報告することを伝達した。

報告第７号　山岳グランプリ公募について

小野寺専務理事が岳連に公募する旨を説明した。

報告第８号　役員選考規程改定日程について

古賀副会長が、役員候補者選考委員会規程、役員選考規程の変更について、ブロック代表をメンバーとしていれることを検討している旨説明した。来月の理事会で提案協議予定。

報告第９号　全日本登山大会新潟大会について

小野寺専務理事が配布資料を基に説明した。望月理事の手元にパンフレットが送付されてきたので、後日、参加理事に送付した。

報告第10号　田中名誉会長卒寿記念祝賀会について

小野寺専務理事が、会費10000円で、富士２の部屋で実施することを説明した。ＪＯＣ，ＪＳＣへの案内は後送。博報堂ＤＹスポーツマーケティングにも送付予定。

報告第11号　オリンピック祝勝会について

開催の方向だが、日程未定。理事には招待送付予定。

報告第12号　第２回神奈川スピードクライミング競技会の公認について

小野寺専務理事が常務理事会で承認された旨伝えた。

報告第13号　審判員資格審査について

小野寺専務理事が常務理事会で承認された旨伝えた。

報告第14号　ＳＣ協賛契約書について

町田ＳＣ部長が配布資料を基に説明した。

８．その他

事務局からの報告について

以下の４点を画面から報告した（添付参照）。

１．支払い日時について
　原則：月末日締翌月末払い
　例外：20日締当月末払い
　急ぎの場合には、個別に相談

２．ＨＰ掲載の更新の都度連絡について（ＳＣ部関係）
　都度連絡しているが、毎日のようになるので、今後は、各自がＨＰを見ていただくこととし、更新の連絡はしない。

３．事務局分掌について

４．次回理事会から、財務担当者がオブザーバーとして、議事録を纏めること等の援助を行う等して、参加を了解された。なお、ＳＣ部会については、ＳＣ担当者２名とも参加を了解された。

以　上

令和６年９月12日　　記録　赤尾　浩一

かすみちゃんのハイキング日記」

表紙のことば

「奥秩父国師ヶ岳の天狗岩と富士」

奥秩父の国師ヶ岳 2,592 mから頂嶺を40 分ほど下ると天狗岩となります。

大嶽山那賀都神社の奥の院と言われ、日本武尊が東征の折り岩室で救われ、山の神のお告げを戴き佩剣を留めたと伝えられています。巨岩集合体の南面には一坪程度の石室があり山の神が祀られています。

国師ヶ岳を訪れた際には是非天狗岩まで足を延ばして頂ければと思います。

撮影者：山梨県山岳連盟　こまくさ山の会
温井一郎

編集後記

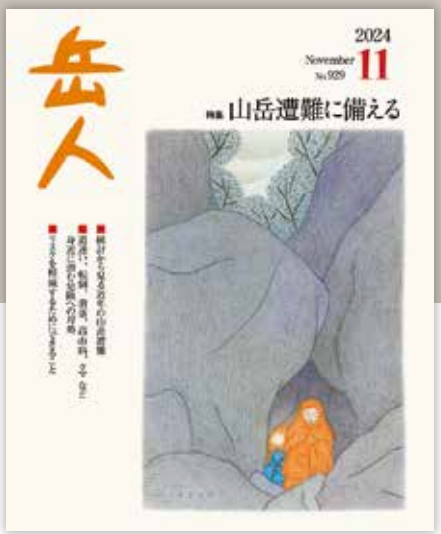
９月は台風の影響もあり、天気予報に悩まされた人は多かったのではないでしょうか。私もその一人で、山の予定をしているのに天気予報では雨。晴れないかなと天気予報とにらめっこ。最終的には山に行って３日間の予定が２日目で下山となりました。雨の山行はリスクがあるので、ヤマテン様が作成した「気象遭難を起こさないための安全登山ノート」をご活用ください。JMSCA のホームページからもダウンロードが可能です。
https://www.jma-sangaku.or.jp/sangaku/safety_note_for_mountaineering/

（松本光顕）

登山月報　第 667 号

定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　令和 6 年10月15日
発行者　東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03 － 5843 － 1631
F A X　03 － 5843 － 1635

山岳雑誌 岳人（がくじん）
山と人、時代をつなぐ「岳人」



11月号発売中
【特集】山岳遭難に備える
モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中！
毎月15日発売　価格1,100円（税込）

▶年間購読が断然おトクです！
年間購読通常特典　購読割引　送料無料　限定品プレゼント
さらに　モンベルクラブ会員さまには　モンベルポイント 5,000P プレゼント！
モンベルクラブ会員さまで現在購読中の方は、次回継続時に5,000Pをプレゼントします。

年間購読特典
岳人オリジナル手ぬぐい

岳人の表紙絵を描く中村みつを氏のイラストを使用！
限定デザイン
岳人カード
全国2,000ヵ所以上でご優待！

全国の温泉や山小屋など提携施設でさまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから！
https://www.gakujin.jp/
全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト
フリーコール 0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組みます

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs（Sustainable Development Goals）とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境

関連する主なSDGs	主な取組
	・再生可能エネルギーの普及支援 ・自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング

安心して暮らせる社会

関連する主なSDGs	主な取組
	・健康づくりの支援 ・先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応

活力のある経済活動

関連する主なSDGs	主な取組
	・次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） ・災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会

日山協山岳共済会のご案内

安全登山は登山者の努め、山岳保険は義務。

ご自身のために、ご家族のために。

日山協山岳共済会とは、

日山協山岳共済会とは公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会（JMSCA）とアライアンスを組み、安全登山の指導・普及を図り、山や自然が好きな人たちのための互助と自立を目指す仲間の集まりです。山岳共済会は、日本の山岳遭難・捜索保険の草分けで、5万人の会員を持つ最大級の山岳共済です。年齢・既往症に関係なくどなたでも入会できます。

2022年 山岳遭難の概況

警察庁生活安全局生活安全企画課
（ 2023年6月9日 ）

発生件数	3,015件	（前年対比 380件増）
遭難者数	3,508人	（前年対比 431人増）
死者・行方不明者	327人	（前年対比 44人増）

JMSCA 2024年版 日山協山岳共済会のしおり

WEBからもお申込みいただけます（ www.sangakukyousai.jp ）